

原 著

## 成人急性期看護実習における カンファレンステーマ提示の有無による学びの検討

島 田 三 鈴<sup>\*1</sup>

### 要 約

急性期看護実習で行われるカンファレンスで、テーマ提示の有無により、実習終了後のレポートでの学びの差異を明らかにした。

学びの内容を分析した結果、《手術侵襲》《周手術期看護》《疼痛》《看護過程》《看護援助方法》《信頼関係構築》《患者の心理状態への気づきとその援助》《コミュニケーション技術》《観察技術》《継続看護》《家族看護》《看護の役割》《他部門連携》《学習方法》以上の14の学び項目が抽出された。項目別に学びの内容を比較検討した結果、実習に必要な基礎的知識をカンファレンステーマとして提示することの効果は、事前準備学習を強化し、基礎的知識を実践的知識に統合・発展できること。さらに、実践的知識は、看護技術実践へとつながると推察された。効果的なカンファレンスの要素として、テーマ設定は、患者理解につながるテーマ設定が望ましいこと。そして、実習開始後、日が浅い初期の導入段階でのカンファレンステーマの提示は、学生のストレスを軽減するものであると考えられた。さらに、カンファレンステーマが学生の要望にそっていることも学びを広げる要因の1つであることが示唆された。

### はじめに

基礎看護教育における臨床実習の意義は、すでに学習した知識・技術・態度を、臨床という現実の中で実践し、使える知識として統合・発展させることにある。しかしながら、既習の知識を実際の臨床現場で活用するには、臨床現場の実態、学生の知識・技術の未熟さ、教育環境や教育システムなどの問題があり、使える知識として統合・発展させることの困難がある。さらに急性期（周手術期）看護実習においては、日々変化する患者の状態についていけないと感じている学生は少なくない<sup>1-2)</sup>。講義では周手術期患者の特徴および看護について学び、また実習前には関連基礎知識として、麻酔や手術の侵襲による生体反応等について学習し、実習に臨んでいるにもかかわらず、実際の実習では、手術前後で大きく変化する患者の状態に戸惑い、また手術直後の患者のイメージがつかず、日々変化する情報の分析や看護援助に一生懸命で、実践できる知識の統合や発展まで至らない状況にいる。つまり、日々変化する患者を把握することが困難であり、学びが深まらな

い状態にあると言える。そのような状況下で、集団学習としてのカンファレンスは、講義と実習での体験を結びつけ、学びを深める要素であると考えられる。

看護実習におけるカンファレンスの目的の1つは、教えたいテーマに関する知識・技術の習得や態度変容、価値観の広がりであるとされている<sup>3)</sup>。しかしカンファレンスに対して苦手意識を持っている学生も少なくない<sup>4-6)</sup>。さらにカンファレンスについては、学びや評価についての報告<sup>5-7)</sup>はあるが、実習中の学びにどう反映されたかという報告は少ない。

そこで、急性期（周手術期）患者を理解するための教育方法の示唆を得ることを目的に、本研究では、看護実習でのカンファレンスと実習終了後のレポートに着目し、カンファレンスの持ち方の違いによって実習終了後のレポートでの学びに差異があるかについて検討し、そこから教育上の手がかりを得たいと考えた。

### 目 的

成人急性期（周手術期）看護実習（以下、急性期看護実習）で行われるカンファレンスにおいて、テーマ

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科  
(連絡先) 島田三鈴 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-Mail: m.shimada@mw.kawasaki-m.ac.jp

提示の有無による実習終了後のレポートでの学びの差異を明らかにし、実習における効果的なカンファレンスの持ち方を検討し、教育上の手がかりを得る。

### 研究方法

#### 1. 調査対象

平成11年5月～12月にA短期大学看護学科にて急性期看護実習を行った3年生48名(7グループ編成)の急性期看護実習終了後のレポートである“急性期看護実習を終えて”を調査対象とした。

#### 2. データ収集方法

急性期看護実習開始後2～4日目に実施されるカンファレンスにおいて、実習を前期に行った3グループ21名には、テーマを提示せず、学生自らのテーマでカンファレンスを実施した(以下、無し群)。一方、後期に実習を行った4グループ27名には、①術後合併症とその看護、②創傷治癒を助ける看護、③早期離床の利点と看護、以上の3点のカンファレンステーマを提示した(以下、有り群)。

以上、7グループ48名の“急性期看護実習を終えて”のレポートを、実習終了後、グループごとに回収した。

なお、前述の3点のカンファレンステーマは無し群・有り群ともに実習前の課題学習としてレポートを課している内容である。

#### 3. 倫理的配慮

研究参加者には研究趣旨に対して十分な説明を行い、プライバシー保護、単位認定後に分析を行うことにより成績評価とは無関係であること、研究への参加・不参加は自由意志であることを説明し、同意を得た。説明は、実習終了後、それぞれのグループの実習記録と“急性期看護実習を終えて”のレポートが提出された後に行った。また、研究参加の意思変更の申し出ができるよう卒業まで猶予期間を設けた。その結果、48名全員の同意が得られた。なお、カンファレンステーマ提示無し群に対しては、実習初日の終了時に、急性期看護実習での過去のカンファレンス議題内容を紹介する等、カンファレンステーマ設定への助言を行った。

#### 4. 分析方法

実習終了後の48名のレポートの記載をデータとし分析した。レポートから、学びに関する部分を抽出し、単文を1記述単位とし、内容に沿ってコード化した。コード化した内容をその性質や表している意味ごとに関連づけ、カテゴリー化し、サブカテゴリーとした。さら意味内容の関連のあるものをまとめ、抽象化を繰り返し、学び項目とした。これらの分析過程において、分類の適切性およびカテゴリー

表現の適切性について何回も見直しを行い、洗練性を高めた。また信頼性・妥当性については、複数の研究者のスーパービジョンを受け確保した。そして学び項目およびサブカテゴリーの当該コード数を算出し、学び項目ではコード数の割合(記載率)を算出した。その後、無し群と有り群の2群間において抽出された学び項目およびサブカテゴリーの比較検討、当該コード数とその内容の差異について比較検討を行った。

#### 5. A短期大学看護学科の実習形態と実習内容

A短期大学看護学科における看護学実習は、1年次前期(8月)に基礎看護学実習Iとして1週間、2年次後期(2月)に基礎看護学実習IIとして2週間、そして3年次の5～12月の期間に、成人・老人看護学実習I(急性期)、成人・老人看護学実習II(慢性期)、成人・老人看護学実習III(回復期)、地域・老人看護学実習、小児看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習の7領域の実習が実施される。3年次に実施されるそれぞれの領域での実習期間は、2～3週間である。5月から7月までの前期に3領域、9月から12月までの後期に4領域をラウンドし、約7ヶ月で7領域の実習を終了する。A短期大学看護学科では、急性期看護実習を成人・老人看護学実習Iに位置づけている。

急性期看護実習での内容は、全身麻酔下での待機手術適応患者を術前から術後にかけて1名受持ち、看護過程を使って看護を学ぶ。実習時間は9時～17時で、その間、患者ケア・病棟スタッフへの報告・カンファレンス・実習記録の整理および自己学習が含まれる。実習中は、教員1名が専属で配置され、看護過程や患者ケアの指導および助言を行い、日々の学習支援を行う。カンファレンスは、実習期間中、学生と指導教員とで毎日開催し、実習最終日のみは、病棟師長も参加してまとめのカンファレンスを開催している。実習終了後は、実習記録と“急性期看護実習を終えて”のレポート提出を課している。なお、急性期看護実習の実習目的・目標は表1に示す通りである。

### 研究結果

“急性期看護実習を終えて”のレポートでの学びに関する抽出コード数は、無し群386、有り群690、計1,076であった。(以下、学び項目として抽出されたカテゴリーを《 》、サブカテゴリーを「 」記述内容を「 」内に示す。)

抽出コードを内容類似性に基づき分類した結果、《手術侵襲》《周手術期看護》《疼痛》《看護過程》《看護援助方法》《信頼関係構築》《患者の心理状態への

表1 急性期看護実習の目的・目標

【目的】
急性期(周手術期)にある対象者の特徴を理解し、生命維持および消耗を防ぐための援助ができる基礎的能力を習得する。
【目標】
1. 急性期(周手術期)にある患者および家族の身体的・心理的・社会的側面の状況を理解できる。
2. 急性期(周手術期)にある患者の生命維持・消耗を最小限に保つため看護過程を用いて援助できる。
3. 急性期(周手術期)にある患者の状況に応じて、生命維持・消耗を最小限に保つための看護技術を実施できる。
4. 急性期(周手術期)の患者がかかわる医療従事者間の連携を理解できる。

気づきとその援助》《コミュニケーション技術》《観察技術》《継続看護》《家族看護》《看護の役割》《他部門連携》《学習方法》の14の学び項目が抽出された(表2)。

表2 学び項目別抽出コード数の2群間比較

学び項目	無し群	有り群
手術侵襲	30(7.8)	78(11.3)
周手術期看護	68(17.6)	100(14.5)
疼痛	6(1.6)	9(1.3)
看護過程	40(10.4)	25(3.6)
看護援助方法	29(7.5)	67(9.7)
信頼関係構築	6(1.6)	7(1.0)
患者の心理状態への気づきとその援助	45(11.7)	124(18.0)
コミュニケーション技術	10(2.6)	40(5.8)
観察技術	21(5.4)	74(10.7)
継続看護	2(0.5)	33(4.8)
家族看護	0(0)	20(2.9)
看護の役割	39(10.1)	39(5.7)
他部門連携	6(1.6)	10(1.4)
学習方法	84(21.8)	64(9.3)

注) ( ) は各群における抽出コードの割合(記載率)

無し群では、《学習方法》が最も多く、21.8%(コード数84)を占めていた。次いで《周手術期看護》が、17.6%(コード数68)であった。その後、《患者の心理状態への気づきとその援助》《看護過程》《看護の役割》《手術侵襲》《看護援助方法》《観察技術》《コミュニケーション技術》《疼痛》《信頼関係構築》《他部門連携》《継続看護》の順であった。約70%が上位5つの学び項目で占められていた。

有り群では、《患者の心理状態への気づきとその援助》が最も多く、18%(コード数124)を占めていた。次いで《周手術期看護》が、14.5%(コード数100)であった。その後、《手術侵襲》《観察技術》

《看護援助方法》《学習方法》《コミュニケーション技術》《看護の役割》《継続看護》《看護過程》《家族看護》《他部門連携》《疼痛》《信頼関係構築》の順であった。約60%強が上位5つの学び項目で占められていた。

無し群・有り群の当該コード数による比較では、両群ともに多かった学び項目は、《周手術期看護》と《患者の心理状態への気づきとその援助》であった。無し群に多く有り群に少なかった項目は、《看護過程》《看護の役割》《学習方法》であり、反対に無し群に少なく有り群に多かった項目は、《観察技術》であった。《看護援助方法》《コミュニケーション技術》《観察技術》等、看護援助技術に関する学び項目のコード数の割合は、無し群は15.5%、有り群は26.2%と有り群の方が高いことがわかる。看護援助技術ではないが、《家族看護》は、有り群のみに存在する学び項目であった。

項目別にみた学びの内容の比較および学びに関するカテゴリー分類の2群間比較(表3)において、《周手術期看護》では、無し群は、「潜在的問題を予測して看護しなければと分かっているが、実際はできなかった」「周手術期は心身ともに変化が大きい」等、身体的変化や術後合併症予防の必要性に関する内容であった。一方、有り群は、「日々変化する患者の状態を把握し、ケアにつなげるのが大変だった」や「術前・術後は主に術後合併症を予防することに重点をおいた」等、実践的ケアに基づいた身体的変化への必要性や術後合併症予防に関する内容であった。さらに治療・処置に伴う看護手術療法の意味は、有り群にのみ抽出された。《手術侵襲》では、無し群は、「術後の侵襲範囲が正常か逸脱かを判断することに困惑した」「術後の生体反応のメカニズムを知っていればもっとよい看護を提供できた」等、侵襲による生体反応への理解不足による反省や後悔に関する内容であった。一方、有り群は、「侵襲が加わると体液バランスの変動やエネルギー物質の動員が起こる」等、侵襲による生体反応の身体的状況が具体的に記述されていた。また理解不足による反省や後悔の記述は少なかった。さらに「侵襲は

表3 学びに関するカテゴリー分類の2群間比較(その1)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	
		無し群	有り群
手術侵襲	侵襲による生体反応	20	38
	侵襲による生体反応の理解不足	9	3
	侵襲による身体変化	1	19
	侵襲の個人差	0	18
周手術期看護	周手術期看護におけるアセスメント	1	2
	身体的変化	30	28
	術後の回復過程	14	9
	術後合併症	11	12
	潜在的看護問題への対処	12	39
	治療・処置に伴う看護	0	5
	手術療法の意味	0	5
疼痛	疼痛アセスメント	5	6
	疼痛へのアプローチ	1	3
看護過程	情報収集	13	5
	アセスメント	6	19
	目標設定	14	1
	計画立案	6	0
	看護過程全般	1	0
看護援助方法	合併症予防援助	5	13
	指導方法	7	13
	離床への援助	12	26
	安全・安楽援助	5	15
信頼関係構築	信頼関係構築	6	4
	関係構築によるケアの拡大	0	3

それぞれの患者や手術方式によって違う」等、侵襲の個人差まで記述されていた。なお、このサブカテゴリーは、有り群にのみ抽出されたものである。《疼痛》では、「痛みはつかみどころがなく戸惑った」「痛みについてアセスメントすることができなかった」等、無し群・有り群ともに術後の創部痛に対する戸惑いに関する内容であった。《看護過程》では、「身体の機能低下、既往歴、精神状態を考慮し、アセスメントや計画を立てなければならぬ」「観察した情報を自分で活かすことができなかった」「術前の栄養状態、貧血、糖尿病の有無、呼吸状態、肝機能など、術後の創傷治癒や回復に影響を与えるものについてもアセスメントをする必要がある」等、情報収集やアセスメントに関するものであったが、有り群の方はアセスメントの視点まで記述されていた。そして、計画立案、看護過程全般は、有り群には抽出されなかった。《信頼関係構築》では、「回復へのケアだけでなく毎日のケアを通して人間関係が築けた」等、無し群・有り群ともにケアやコミュニケーションを通じた信頼関係構築に関するものであった。それに加えて、有り群は、サブカテゴリーとして、関係構築によるケアの拡大が抽

出された。《患者の心理状態への気づきとその援助》では、「身体の一部を喪失し、今後への変化への悲しみや不安がある」等、無し群・有り群ともに手術への不安やボディイメージの変化と受容に対する心理描写が多かった。加えて、有り群は、「肝細胞がんの再発で、落ち込み、手術をしても先が長くないのではないかと絶望感を訴えていた」等、がん告知による心理状態の心理描写の細かい記述があった。さらに、傾聴や精神的援助等、援助方法まで記述されていた。なお、傾聴は、無し群には存在しなかった。《看護援助方法》では、「術後、早期離床を積極的に促すことが必要」等、無し群・有り群ともに離床への援助であったが、無し群に比べ有り群の方は、実践的ケアに基づいた内容であった。さらに有り群は、「術前から合併症予防の呼吸訓練が始まっている」等、合併症予防援助や指導方法についての記述もされていた。《コミュニケーション技術》では、無し群では、「患者との日々のコミュニケーションが大切」等、必要性に関するものであった。一方、有り群は、「もっとコミュニケーション技術を身につけたい」等、コミュニケーション技術向上意欲に関するものであった。

表3 学びに関するカテゴリー分類の2群間比較(その2)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	
		無し群	有り群
患者の心理状態への気づきとその援助	手術への不安	25	31
	術後の心理的变化	9	11
	ボディイメージの変化と受容	4	8
	がん告知による心理状態	0	15
	性格特性	3	10
	不安のアセスメント	1	25
	十分な説明	2	5
	傾聴	0	5
	精神的援助	1	14
コミュニケーション技術	必要性	4	8
	コミュニケーション技術向上意欲	1	9
	コミュニケーションの困難さ	5	23
観察技術	必要性	9	24
	視点	12	46
	実践	0	4
継続看護	退院指導	2	12
	必要性と視点	0	21
家族看護	必要性	0	13
	家族は重要なキーパーソン	0	7
看護の役割	看護師の使命感	18	26
	個別性	21	13
他部門連携	病棟・リハビリ室・手術室との連携	6	10
学習方法	今後の展望	43	46
	学習混乱	5	4
	学習不足	36	9
	カンファレンス効果	0	5

そして、コミュニケーションの困難さは、無し群より有り群の方が、コード数が多かった。その具体的記述内容は「コミュニケーションの困難さを改めて感じた」等、コミュニケーションの取り方への戸惑いに関する内容であった。《観察技術》では、無し群は、「十分に観察して異常の有無を確認することが重要」等、必要性に関するものであった。一方、有り群は、「観察はただ見るのではなく、目的を持って行わないと意味がない」「観察は、手術侵襲でどのような生体反応を引き起こし、どのような経過で回復していくかの知識がないと視点がみだせない」等、観察のためには知識や目的が必要であることや観察の視点、および実践まで記述されていた。《継続看護》では、「退院に向けての計画を立てることが必要だ」等、無し群・有り群ともに退院指導に関するものであったが、有り群は、「入院時に退院後のことも考えて援助しなければならない」「入院前の生活を把握して看護することが大切」等、継続看護の必要性と視点まで記述されていた。なお、無し群における《継続看護》の当該コードは

2個のみであった。《家族看護》は、有り群のみに存在する学び項目である。その内容は、「患者の心理的サポートをするのは家族が一番」等、患者にとって家族は重要なキーパーソンであること。さらに「患者のみでなく家族にも目を向けて接していかなければならない」等、家族看護の必要性に関するものであった。《看護の役割》では、「看護師は冷静さ、機敏な行動、瞬時の判断力も身につけなければならない」等、無し群・有り群ともに看護師の使命感に関するもの、および「患者それぞれにあった援助を行わなければならない」等、個別性に関するものであった。《他部門連携》では、「手術室での申し送りは短時間で必要事項を申し送らなければならない」等、無し群・有り群ともに病棟・リハビリ室・手術室との連携に関するものであった。《学習方法》では、「知識・技術の必要性をふまへ身に付く学習をしたい」等、無し群・有り群ともに、今後の展望に関するものが多かった。有り群は、他にも「カンファレンスと一緒に考えていくことができよかった」「学内では想像しにくかつ

た術後合併症の事例学習によって頭に入りやすかった」等、カンファレンス効果の記述があった。また今後の展望では、学習効果に関する内容の記述があった。一方、無し群では、学習不足に関するものが多かった。

以上、項目別に見た学びの内容の比較において、差異がなかった項目は、《疼痛》《信頼関係構築》《患者の心理状態への気づきとその看護》《看護の役割》《他部門連携》の5つの学び項目であり、差異があった項目は、《手術侵襲》《周手術期看護》《看護過程》《看護援助方法》《コミュニケーション技術》《観察技術》《継続看護》《家族看護》《学習方法》の9つの学び項目であった。差異の内容は、それぞれの項目において、無し群が抽象的・観念的であるのに対し、有り群は具体的・体験的であった。さらに無し群は「難しかった」「分からなかった」「できなかった」等、学びに対する困惑や後悔を示す表現が多かったが、有り群は「気づいた」「感じた」「分かった」「学んだ」等、自分の思いや学びに対する肯定的な表現が多かった。

#### 考 察

結果から、①術後合併症とその看護、②創傷治癒を助ける看護、③早期離床の利点と看護、以上の3点をカンファレンステーマとして提示したことが、実習終了後のレポートに表現された学びにどのような効果があったのかについて考察する。

項目別にみた学びの内容の比較から、差異がなかった項目は、《疼痛》《信頼関係構築》《患者の心理状態への気づきとその看護》《看護の役割》《他部門連携》の5つの学び項目、差異があった項目は、《手術侵襲》《周手術期看護》《看護過程》《看護援助方法》《コミュニケーション技術》《観察技術》《継続看護》《家族看護》《学習方法》の9つの学び項目であり、内容的差異は、無し群が抽象的・観念的で学びに対する困惑や後悔であったが、有り群は具体的・体験的で学びに対して肯定的であった。そのうち《周手術期看護》《学習方法》における学びの内容的差異から、カンファレンステーマ提示の有無の違いによる学びの効果について、以下のように考える。

周手術期看護実習では、周手術期患者の理解の困難がある<sup>1)</sup>とされているように、患者理解の困難が、既習の基礎的知識を使える知識として統合・発展させることを困難にし、さらには学びを深めることを困難にしている要因の1つであると言える。《周手術期看護》において、患者理解の困難、つまり急性期看護実習にとって基礎的知識である麻酔や手術による身体的変化や術後合併症予防の知識不足

により、カンファレンステーマを提示しなかった無し群は、それらの必要性の記述に留まったと考えることができる。しかし、有り群は、実践的ケアに基づいた記述であった。これは実習開始の2～4日目に前述の①②③のテーマでカンファレンスを実施した。そのうち①術後合併症とその看護、②創傷治癒を助ける看護は、手術侵襲やそれによる生体反応の基礎的知識がなければ話し合えないテーマである。よって前述の①②のテーマをカンファレンスで取り上げたことで、手術侵襲による生体反応等の基礎的知識が強化され、術後の患者についてのイメージを容易にし、また術後看護についても学習が深まったために、知識が実践として使えるまでに発展したことで、具体的・体験的記述になったと考える。

さらに《学習方法》では、無し群にコード数が多く、その主な内容は、知識不足への後悔や「分からなかった」等、学習混乱であった。一方、有り群は「学びを深めることができた」等、実習での学習体験を肯定的にとらえている。このことから無し群は、基礎的知識を活用できずにいたことが伺える。一方、有り群は、基礎的知識を活用・実践したことで、学びを深めることができたと言える。

臨床実習にとって、対象理解は必要不可欠であり、対象理解の学びについての研究報告<sup>7-9)</sup>もある。換言すれば、看護実習目的達成のためには、対象理解は不可欠の要素である。対象理解のためには、基礎的知識や対象の特徴をとらえた看護知識が必要となる。本研究で提示したカンファレンステーマは、基礎的知識および看護知識に関するものであった。カンファレンスでの学びの共有によって、対象理解が深まったと言える。さらに対象理解が深まったことによって、《観察技術》や《コミュニケーション技術》、また、精神的援助技術につながる《患者の心理状態への気づきとその援助》等、看護技術に関する学びに統合・発展され、患者を取り巻く《家族看護》にまで学びが広がったと考える。

以上のことから、実習2～4日目に必要な基礎的知識をカンファレンステーマとして提示することは、実習前の学習効果の検討の研究報告<sup>10-12)</sup>同様、事前準備学習を強化し、基礎的知識を実践的知識に統合・発展できること。その時、患者理解につながるテーマ設定が望ましいこと。さらに、基礎的知識を実践的知識に統合・発展できることによって、知識は看護技術の実践へと統合・発展できるものであると推察される。

また、学生はカンファレンステーマ設定を難しいと感じている<sup>13)</sup>。実習が開始されて、まだ日が浅い時期は、学生は新しい実習環境や受持ち患者との

人間関係の構築等、学生を取り巻く人的・物的環境に不慣れな時期である。その不慣れな実習2～4日目に、困難と感じているカンファレンステーマを教員が提示することで、学生のストレスが軽減され、実習への導入を容易にした可能性がある。カンファレンステーマ設定への助言により、学生の事前準備学習の効果を上げ、カンファレンスで積極的な意見交換ができるようになったとの研究報告<sup>14)</sup>がある。すなわち、実習開始の初期の導入段階で、対象理解につながる内容のカンファレンステーマを提示することは、学生のストレスを軽減し、積極性を育み、学習を深める要因の1つであると考えられる。

さらに、実習2～4日目に事前準備学習である基礎的知識をカンファレンステーマとして取り上げたことは、術前の患者を受持っている学生にとっては、まだ経験していないことへの備えとなり、術後看護のイメージ化につながる。また、既に受持ち患者が術後になっている学生には、既に体験したことを振り返り、考えや学びを深めることにつながる。「考えや学びが深まる」「いろいろな意見が交わされる」「まだ経験していないことに備えができる」と学生が認識するカンファレンスの様相の研究報告<sup>15)</sup>と同様に、提示したカンファレンステーマが学生の要望に沿っていたと言える。要望に沿ったテーマであったからこそ、「《学習方法》の有り群に、「みんなで考え、学びを共有できた」「カンファレンスで一緒に考えていくことができよかった」「カンファレンスでみんなの意見を聞いた」等、カンファレンスに関する記述があったと考える。カンファレンステーマが学生の要望に沿っていることは、実習への関心を高め、積極的態へと発展するのではないだろうか。

学び項目のうち、「《家族看護》」は、有り群にのみ抽出された項目であった。カンファレンステーマに実習での重要な要素を取り入れることで学びにつながったとの研究報告<sup>16)</sup>がある。本研究も同様のことが言える。それは、実習にとって重要な要素である術後合併症予防とその看護や術後看護の要点をカンファレンステーマとして取り上げたことによって、「《家族看護》」の学びまで広げることができたと考えられる。つまり、実習にとって重要となる要素をカンファレンステーマとすることが、学びを広げる要因であると推察できる。

以上のことから、急性期看護実習に必要と思われる知識に関するテーマを、実習2～4日目の初期に取り上げ、提示することは、実習での学びを統合・発展するための一助であろうと考える。そして実習における様々な体験の意味づけができ、理解が深まり、知識の統合・発展ができる。それが満足感や達

成感となり、最終的には意欲的な実習<sup>17)</sup>ができることにつながる。

最後に、無し群・有り群の両群における学びの差異はなかったが、「《疼痛》」においては、術後の創部痛への戸惑い、そして「《コミュニケーション技術》」では、コミュニケーションの取り方への戸惑いに関する内容があった。これらは看護学生が看護上の判断困難を感じる場面の研究報告<sup>18)</sup>と一致している。疼痛は主観的なものであり、経験者以外はイメージができていくものである。疼痛へのアセスメントや具体的な看護ケアについてもカンファレンステーマとして取り上げ、学びを深める必要がある。さらに看護の進め方の判断材料を提供する<sup>18)</sup>等、教授方法を工夫する必要がある。またコミュニケーションへの戸惑いは、現代の大学生の人間関係の希薄さ<sup>19)</sup>を象徴しているものである。カンファレンスや実習に限らず、日々の教育的関わりの中でも異世代間でコミュニケーションが取れるよう教授する必要がある。

#### 研究の限界

無し群・有り群では、実習時期が3年次前期と後期の違いがある。両者を比較するには、カンファレンステーマ提示以外に、学びに影響を与える多くの変数が存在する。急性期看護実習以外の他領域の看護実習経験、グループダイナミクスとグループとしての成長および学生自身の成長などが学びに影響を与える要因として考えられる。よって、カンファレンステーマ提示が直接的に両群の学びの差異につながるとは言いがたい。しかし、有り群にカンファレンス効果について肯定的な記述があったことは否めない事実である。今後は、カンファレンステーマを提示したことが良かったかなど、カンファレンス評価に関するアンケート調査や面接調査等を学生に実施する必要がある。

#### まとめ

急性期看護実習で行われるカンファレンスで、テーマ提示の有無による実習終了後のレポートでの学びの内容を分析した結果、「《手術侵襲》」「《周手術期看護》」「《疼痛》」「《看護過程》」「《看護援助方法》」「《信頼関係構築》」「《患者の心理状態への気づきとその援助》」「《コミュニケーション技術》」「《観察技術》」「《継続看護》」「《家族看護》」「《看護の役割》」「《他部門連携》」「《学習方法》」の14の学び項目が抽出された。項目別に学びの内容を比較検討した結果、実習2～4日目に実習に必要な基礎的知識をカンファレンステーマとして提示することは、事前準備学習を強化し、基礎的知識を実践的知識に

統合・発展できること。さらに基礎的知識が、実践的知識に統合・発展できることによって、看護技術の実践へと統合・発展できるものと考えられた。その時、テーマとして取り上げる内容は、患者理解につながるテーマ設定が望ましいことが示唆された。

今後は、学生からのカンファレンス評価等を参考に、カンファレンス効果について検討し、さらなる教育上の手がかりを得ることが課題である。

本論文の要旨は、日本看護学教育学会第16回学術集会において発表した。

## 文 献

- 1) 明石恵子：急性期（周手術期）看護実習の“困難”をどう乗り越えるか。看護展望，26(11)，17-22，2001。
- 2) 辻あさみ，上田稚代子，竹村節子：成人看護実習（周手術期看護実習）で学生が学んだ対象理解の分析 —過去5年間のテーマカンファレンスの内容より—。日本看護学教育学会第13回学術集会講演集，158，2003。
- 3) 川島みどり，杉野元子：看護カンファレンス，第2版，医学書院，東京，153-173，1994。
- 4) 藤野ユリ子：看護学生がグループワークで感じる困難と満足の関係。日本看護学教育学会誌，15(1)，1-13，2005。
- 5) 堤かおり，糸井裕子：臨地実習における学生カンファレンスの実態（その1）—カンファレンスで感じる困難と終了後の満足感—。日本看護学教育学会第16回学術集会講演集，166，2006。
- 6) 糸井裕子，堤かおり：臨地実習における学生カンファレンスの実態（その2）—カンファレンス終了後の課題やメンバーに対する困難と満足—。日本看護学教育学会第16回学術集会講演集，166，2006。
- 7) 正木治恵，野口美和子，湯浅美千代，佐藤弘美，黒田久美子：臨床実習カンファレンスの展開の分析。千葉大学看護学部紀要，19，27-34，1997。
- 8) 小柳陽子，宮崎麻里，藤野彰子，深谷智恵子，阿部三千代，山田秀樹：成人看護実習カンファレンスの発言からみた学生の学び。日本看護学教育学会第14回学術集会講演集，167，2006。
- 9) 安福真弓，細川つや子，安藤勝弘：急性期看護実習における学生の学び。吉備国際大学保健科学部紀要，10，49-53，2005。
- 10) 村上千鶴，竹村節子，上田稚代子，辻あさみ，池田敬子：成人看護学における学内演習の実習への効果の検討，和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要，4，47-55，2001。
- 11) 関美奈子，上田稚代子，辻あさみ，竹村節子，畑野富美，池田敬子，坂本由希子，土橋千鶴：成人看護学における臨地実習前演習の学習効果の検討。和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要，5，45-54，2002。
- 12) 猪股祥子，伊藤登茂子，煙山晶子，浅沼義博：周手術期看護実習における知識の習得状況に関する評価 —カンファレンスの有用性に着目して—。秋田大学医療技術短期大学部紀要，10(2)，156-164，2002。
- 13) 市江和子：小児看護学実習のカンファレンスにおける学生の学びの検討。日本看護研究学会雑誌，27(3)，123，2004。
- 14) 片山美恵子，菊地祐子，十文字泰子，鈴木富士子，佐川明美，永瀬聖子，小松洋子，鈴木邦子：実習カンファレンスの指導方法の検討 —学生と臨床指導者の意識調査から—。福島県農村医学学会誌，40(1)，98-102，2004。
- 15) 中西純子，岡田ルリ子，塩月ぬい子，原美香子，山口利子，上杉純美：学生にとって意味のあるカンファレンスとその関連要因。愛媛県立医療技術大学紀要，2(1)，21-27，2005。
- 16) 塚本友栄，伊藤まゆみ，大内章子：成人看護学実習でQOLの視点を取り入れたことによる学生の学び。日本看護学教育学会誌，12(1)，19-25，2002。
- 17) 岡本佐智子，長谷川真美，今川詢子，中山久美子，武田美津代，貝塚みどり：周手術期看護実習における意欲に関連する要因 —満足感・達成感・自己効力感：実習のイメージからの分析—。看護教育，42(8)，718-723，2001。
- 18) 布佐真理子：臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ。日本看護科学学会誌，19(2)，78-86，1999。
- 19) 宮坂美帆，日下和代，叶谷由佳，中山栄純：孤独感からみた現代医療系大学生の人間関係の実態。看護教育，42(12)，1116-1121，2001。

(平成19年6月15日受理)



**Examination of Learning through the Presence of a Conference Theme  
Presentation in an Adult Acute Stage of Nursing Practicum**

Misuzu SHIMADA

(Accepted Jun. 15, 2007)

Key words : conference theme, learn, nursing practicum for an adult acute stage

**Abstract**

The purpose of this study is to clarify the difference in learning outcome the setting or no setting a conference theme in an adult acute stage of nursing practicum. The result of this study was; the first, to assign a conference theme set in nursing practicum could enhance the prior preparation study and it enable to integrate/ to develop a fundamental knowledge in terms of practical nursing knowledgement. It could also put a practical knowledgement in nursing discipline. The second, the conference theme setting in practicum that leads a patient understanding is an element of the enhancement of the effective students ' conference in practicum.

Correspondence to : Misuzu SHIMADA

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan

E-Mail: [m.shimada@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:m.shimada@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.17, No.1, 2007 97-105)